

令和3年11月1日

敬愛短大附属幼稚園だより 11月号

運動会いかがでしたでしょうか。子どもたちは園庭で先生と一緒にコロナどこ吹く風とばかりにみんなで頑張っていました。新型コロナの感染は落ち着きを見せてはいますが、第6波も予見されており、予断は許されません。また、昨年度は例年になく発生の少なかったインフルエンザの流行も気になります。手洗い・うがい・マスクのほか、インフルエンザの予防接種もぜひ継続して行くことが大切です。仮に感染しても重篤化することが少なく、軽く済むことが言われています。

幼稚園では蝶を呼ぶ仕組みづくりの一環として、蝶の幼虫が食べる食草を意図的に栽培しています。その成果が出てきており、高洲地域では見かけなかったキアゲハがパセリに卵を産んで幼虫から蛹になっています。また、高洲地域にはクスの木があるので、アオスジアゲハなどの大型の蝶が幼稚園の蝶を呼ぶ花であるブッドレア（フサフジウツギ）に呼び寄せられています。少し小型の蝶のタテハチョウやツマグロヒョウモンの他にヤマトシジミもオレンジ色のキバナコスモスに集まっています。環境を整えるとこの後に述べることと同じように良い循環になります。

「いいね、それ」といつでも言える環境

世界的に有名な企業である Google の流儀について学ぶ機会がありました。その Google の流儀というのは「ノー バッド」ではなく、「イエス アンド」であると語られています。優しく言えば、「いいね それ」ということが言える人間関係の環境と解釈できます。

つまり、企業として常に様々な競争に打ち勝っていかなければならないわけですが、その競争に打ち勝つためには、他では行っていない方法などの提案であったり、更にそうした考え方を実行するための仕組みや広報活動であったりテクノロジーの活用や開発分野で時間との競争が行われます。

他に類を見ない新しい考え方や製品の産出には多くの人が知恵を集めてアイデアを出し合わなくてはなりません。そうした際に相手の考えを否定したり責めたりしないで、たとえそれがライトなアイデアであったとしても「いいね それ」ということばが自然に出るような環境が企業をより発展させていくことにつながって行くのではないのでしょうか。

私たちの社会生活もこの考え方を取り入れて行くことでより一層風通しの良い、何でも気軽に話せる環境にして行くことがとても大切です。

例えば、自治会で古くから地域に貢献してきた会長さんが、引っ越しをしてきて新しく自治会員になられた方に、「ここはこのやり方があるので口を挟むな」と言わんばかりの態度で接していて、誰も自分の考えを述べなくなっているというお話も聞きます。こうなると、誰からも新しいアイデアなど出ようがありません。まさに風通しの良くない独善的な地域と化してしまいます。環境の良い地域社会に発展するどころか益々硬直化した地域社会になってしましまい、住みにくい地域となります。

相手を思いやるのはことばでは簡単ですが、人間は感情を持つ生き物ですから感情に流されて相手を否定したりして心を傷つけてしまうことも少なくありません。そのような時こそ Google 流の「いいね それ」のことばが相手の方に向けて出ると良い関係を築くことができ良い地域社会を形成することができるようになります。

私もこのことを聞いて自分も職場でも地域社会でも相手の考えを認められるように常に努力していきたいと強く思いましたし、幼稚園の子どもたちにも身に付けてほしいと考えています。

本幼稚園の母体でもある千葉敬愛短期大学学長の明石要一先生が短大の入学希望者に対して「小さな失敗を重ねた人を求む」というメッセージを出しています。まさに「ノー バッド」ではなく、「イエス アンド」への転換につながるメッセージだといつも考えています。

(園長 杉山清志)